

社会教育委員ニューズレター 第20号

発行 佐賀県社会教育委員連絡協議会
事務局 佐賀県県民環境部まなび課内

県社教委連第2回理事会

11月20日、2回目の理事会を県庁県民環境部内会議室で開催しました。

協議事項として、令和6年度佐賀県社会教育委員実践研修会(案)について協議が行われました。佐賀市の佐賀県市町会館において、「これからの未来を担うひとづくり」未来を担う青少年の地域参画と地域における家庭教育支援の取組」をテーマとしたトークセッション及びグループワークを行うことについて承認されました。

また、報告事項として、第66回全国大会茨城大会、第67回全国大会岩手大会、第68回全国大会大阪大会及び令和6年度第54回九州大会鹿児島大会、令和7年度第55回九州大会福岡大会、令和6年度全国社会教育委員連合表彰の被表彰者の決定について報告がありました。

した。

九社連運営委員会・理事会

11月7日、鹿児島市で開催されました。

運営委員会の議案として令和5年度第53回宮崎大会収支決算報告、令和6年度第54回鹿児島大会収支予算案及び同大会の運営並びに令和7年度第55回福岡大会の開催について協議され、原案どおり承認されました。

理事会の議案として令和6年度役員の役員案と社会教育委員の九州大会及び全国大会の開催順が提案され、承認されました。

全国社会教育委員連合口総会

10月24日、第2回総会が水戸市で開催されました。

○第1号議案 第67回全国社会教育研究大会(岩手大会)について

開催要項素案が承認されました。
○第2号議案 第68回全国社会教育研究大会(大阪大会)について

開催要項素案が承認されました。
○第3号議案 第69回全国社会教育研究大会の開催地について 東北北陸地区で開催することが承認されました。

○第4号議案 理事の退任及び選任について
理事の退任(1名)、それに伴う選任が承認されました。

県社教委連実践研修会

1月28日、令和6年度の実践研修会を佐賀市の佐賀県市町会館において開催しました。

上野会長のあいさつの後、「これからの未来を担うひとづくり」未来を担う青少年の地域参画と地域における家庭教育支援の取組」をテーマにトークセッションを行いました。

上野会長、コーディネーターに山口副会長、パネリストに0-100地域の輪 中島直子代表 佐賀県立鹿児島高等学校 芝原正章教諭 県こども家庭課 草田彩夏さんをお迎えして、トークセッションを行っていただきました。

その後、グループワークを行いました。



その概要は、次のとおりです。

○上野会長あいさつ

上野会長から研修会の冒頭に次のとおりあいさつがありました。

みなさま、こんにちは。本日は、

寒い中たくさんお集まりいただきありがとうございます。

午前中、佐賀市で教育委員会との懇談会があり、いくつか協議をしてきました。

1つは、家庭の様子が変わってきたということ。30年位前まではどの地域でも3世代の家庭が多かったのですが、最近、3世代で暮らしている家庭はごくごく少数となりました。おじいちゃん、おばあちゃんが近くに住んでいる場合はあるかもしれませんが、今は、一緒に暮らして、おじいちゃん、おばあちゃんの子育ての仕方を若いご夫婦が見よう見まねで子育てするという機会が減ってきました。



<上野会長>

もう1つは、地域に大人がいな
いということ。ここにいらつ

しやる社会教育委員のみなさまは、子どもの見守り隊とか、青少年健全育成とか、いろんな子どもの活動に参加されています。しかし、退職年齢が長くなって、70歳くらいまで働きたいという高齢者が増えてきました。つまり、職場へ行かれていく方が増えてきて、地域で子どもたちを見守ったりとか、子どもたちの活動に取り組んだりしていただけの方たちがかなり少数になってきました。そうすると、働いている方たちにそういう活動をどうやってアプローチしていくかが、これからの社会教育の課題となってくるという話をしました。

みなさまはぜひ教育委員会と協議していただいて、本日の研修会を1つでも2つでもヒントにしたい。これからのマネジメントの活動に寄与していただければと思います。

○全社連表彰

白石町の大串京子さんが全国社会教育委員連合表彰を受賞されました。表彰式が行われる全国大会への参加ができなかったため、

実践研修会の場で表彰状の授与を行いました。

***受賞おめでとうございます。**



<上野会長 (左)、大串京子さん (右)>

○トークセッション

テーマ これからの未来を担うひととづくり
地域参画と地域における家庭教育支援の取組

最初に山口副会長から、研修会のテーマの趣旨や進め方などについて説明がありました。

パネリストの0-100地域の輪中島直子さんからは、子育て支援をはじめ、高校生が参画している

子ども食堂や市をまきこんだ地域応援事業など、現在取り組まれている活動内容が紹介されました。

佐賀県立鹿島高等学校教諭の芝原正章さんからは、学校と地域の連携がうまく行われている事例として鹿島高校の活動内容が紹介されました。

佐賀県こども家庭課の草田彩夏さんからは子どもの居場所に関する県の取り組みなどが紹介されました。それぞれの発言の要旨については、次のとおりです。

(山口) なぜ、このようなテーマにしたのかというと、令和3年度に提言された「佐賀の未来を拓く地域・学校・家庭のきずなづくりをめざして」のなかの4番目に「子どもたちが安心して育つ地域をつくりましょう」というのがあります。地域の中で、いろんな方がこのことに取り組んでいることをまず知って、それをつなげていくのが社会教育委員として大切な役割ではないかということ掲げさせていただきました。



<山口副会長>

今回3人のパネリストの方の話を聞いて、情報収集していただいて、学びを深めていただければと思います。

(中島) 子育てで気づいたことがあります。「ママが笑えば子どもも笑う」というのは真実だなということですね。お母さんが元気でないと、お母さんに余裕がないと簡単に孤立してしまいます。未来の担い手を支える、子育てを支えることは、親子まるごと支えることだと思います。

活動を行うようになった理由があります。それは、これからの地域づくりというのは、みんなが一緒に年を重ねていく、そして、災害や病気、予期せぬことという

のは、誰もが経験し得るという2つの共通点を視点に活動していきたいという思いが湧いてきたからです。このことがあるから、地域全体で必要な「助け合い」を強化していきたいと思えました。

大事にしていることは、自発的な気持ちに伴う「互助」です。みなさんは困ったときや、何かあったときに浮かぶ顔がありますか。「あの人大丈夫かな」「連絡を取ってみようかな」という関係性は、家族や友人にとどまらず、できれば、暮らしている地域の中で生まれるなら、助け合いの地域が進むのではないかと思っています。

これから2つの取組と2つのイベントについてお話しします。

まずは、「公民館の活用」です。私はベビーマッサージ・リトミック講師の資格を持っていましたが、自宅以外でできる場所がなかったときに、ある公民館の方から、「講師登録できるよ」と教えていただいて、今も講師として場所を借りています。定期的に公民館を借りるようになると、自然と公民館を利用されている方と知り合い、つながるようになりました。そして、

情報交換を行うようになって地域にいろんな思いで関わっている方を知るようになりました。それから、地域の人たちを巻き込んで、協力してもらい、子育てしているお母さんたちに防災教室や性教育などを実施しました。



<中島直子さん>

次は「子ども食堂の活動」です。最初は子ども食堂のイメージが、本当に必要な人に届くのかな、そうじゃないと意味がないなという感じでした。しかし、来てくれるどんな子どもたちも地域の大切な子どもたちに変わりはないということ、いろんな目的で子ども食堂は開催することができるといことを、子ども食堂をやりたいという強い思いの仲間から教えていただきました。また、50代、60代の方で、子どもたちと関わりたいと

思っている時間の余裕がある人はたくさんいるけれども、子どもたちに関わる方法を知っている人たちはいないということも仲間から教わりました。子ども食堂を通してそのような人たちとの交流が増えるかもしれないと思い、今の仲間たちと子ども食堂を始めました。高校生が参画しています。毎回地元でとれた食材でおやつを作ってくれます。一緒に調理するだけでなく、そこに集まった小学生と交流したり、一緒に食事したり、大人にとっても子どもにとっても高校生の存在は大きいです。

さらに子ども食堂は多世代で多職種の地域の人たちに支えられています。

次に、官民連携の2つのイベントについてお話しします。

1つ目は、高校生を含め10団体の協力を得て、市役所において展示や講演、地域の方に参加してもらう交流の場を開催しました。チラシはあっても、顔が浮かばないとなかなか相談できないと思います。顔が見える関係を築くことができました。

2つ目は、唐津には相談できる、

話を聞いてくれる人がいるということを知ってほしいという思いで100人の方にアンケートを実施し、その報告会とトークセッションを開催しました。唐津には行政だけでなく、NPO法人の方とか、たくさん話を聞いてくれる人がいるということを知りましたという感想をいただきました。

子どもだけでなく、大人が安心して居場所や関係づくりを育んでいけたらと思います。

（芝原）『学校と地域をつなぐ つなげる つながった』について、「つなぐ」とは誰がつなぐのか、「つなげる」とはどのような方法でつなぐのか、「つながった」とはどのような成果が表れるのか、について本校の実践を報告します。

現在、高校は大きな変革の時を迎えています。令和4年に「総合的な探求の時間」がスタートしました。本校では、鹿島市との連携・協働と全面的なバックアップのもと『鹿島さいこうプロジェクト』に取り組み、様々なプロジェクトを立ち上げています。週1時間の授業の中で生徒が鹿島市の課題を

発見し、テーマを設定し、課題解決へ向けてのプランを立て、行動し、フィードバックし、実現に向けて取り組んでいます。現代を生き抜く能力を培える効果的な教科ですが、教師だけではうまく生徒の探究心を満足させることが難しいので、ぜひ地域の方々の力をお借りしたいと願っています。



<芝原正章さん>

次に「キャリア教育の充実」です。進路も入試制度も多様化しており、学校現場は、個々の希望に応じた進路指導をどのように行っていけばよいのかを模索している状況です。そこで地域の皆さんの様々な職業や立場の視点や進路選択のあり方を参考にさせていただければ、生徒のキャリア選択の幅が一層広がっていくのではないかと期待を寄せています。

そして、佐賀県教育委員会が行っている『唯一無二の誇り高き学校づくりプロジェクト』では各学校の魅力を最大限に発揮するための取組を実践しています。

その中でも鹿島高校は「SAG Aコラボレーションスクール」の指定を受けており、「地域の子どもは地域で育てる」をテーマに、地域と学校が効果的に連携・協働することで、学校の魅力化を一層推進するための研究を行っています。その結果、地域という学びのフィールドで、生徒が様々な活動をしており、学校も地域も活気に満ち溢れています。したがって、今後は、地域でできることは、地域に任せていくという考え方へ変えていかなければならないと思います。しかし、高校におけるコミュニケーションスクールの運営は、生徒が広範囲から通学して来ているため、地域を巻き込んで活動していくのが難しく、多くの課題を抱えています。

本校の学校運営協議会は校長の考えで、「何か面白いことができそうな人を集めよう」と、幅広い年齢層・職種から人選しています。

また、「魅力化評価部会」「キャリア教育部会」「地域連携部会」の3つの部会を設置し、熟議を行っています。「キャリア教育部会」では、『旭ヶ岡キャリアラボ』と『旭ヶ岡キャリア塾』に力を入れていきます。『旭ヶ岡キャリアラボ』は、空き教室を卒業生や地域の方に開放し自由に出入りしていただき、進路やキャリアについて生徒が気軽に相談できる場を設置しています。また、『旭ヶ岡キャリア塾』というシンポジウムを毎年開催しています。午前は全体会、午後はキャリア別に20講座を開設し、生徒が興味のある2講座を選択し、先輩の講話を聴講し、キャリアの形成に役立てています。

また、本校生が鹿島市内にある小中学校に向き、学習やスポーツを教える『高校生ティーチャー』を行っています。参加した生徒は、教えることの難しさ、楽しさを感じていたようです。また、地域のイベントやボランティアへ参加する『高校生サポーター』では、年間600名以上の生徒が活動しました。『高校生サポーター』の依頼を受ける条件として、①その活動

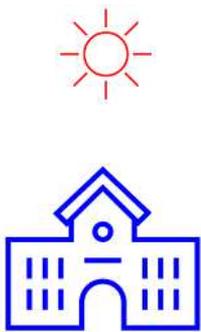
に生徒の学びの視点が入ること、
 ②事前の説明会を実施してもらうこと、
 ③主催者側に保険へ加入してもらうこと、
 ④「ボランティア証明書」を発行してもらうこと、
 ⑤その後のつながりを大切にしてもらう、ということ。『高校生サポーター』へ参加する生徒の目的の一つに「ボランティア証明書」を発行してもらえることがあります。これが就職や進学の際に評価されるため、大きな動機付けとなつていきます。また、参加したすべての生徒が、「参加してよかった」という感想を持っており、自己肯定感が高まっているようです。中には、「次のボランティアはないですか？」と聞いてくるようになり、地域で活動することに喜びを感じているようです。その体験により、キャリアや進路選択の幅が多岐に広がるのではとその効果を期待しています。この『高校生サポーター』の輪が佐賀県内へと広がってほしいので、ぜひ地域の高校へ依頼をしてみてください。

また、商業科では地元商店・企業とコラボして地元産品を商品化し、販売しています。食品調理科

では小学校のPTAと協働し、「親子料理教室」を行いました。

高校生を対象とした「高校魅力化アンケート」の結果によると、「地域に尊敬する大人はいますか？」という設問で、三年前は60%でしたが、現在では80%まで上昇してきました。地域の方々とふれ合う機会が増えたことで、地域の大人への憧れや尊敬の気持ちを持ち始めたということです。

最後にみなさんにお願いがあります。一度、地域の高校に行ってください。そこに皆さんとつながりたいと思っている教師が必ずいるはずです。その教師とつながってください。そして、地域を愛する高校生に声をかけ、「活躍の場」と「学びの場」を与えてください。ぜひ皆さんと高校生が一緒になり、高校生のアイデアとパワーを活かし、何かをやっていたきたいです。高校生は、待っています。



(草田) そもそも子どもの居場所とは何だろうかという点からお話したいと思います。佐賀県では、子どもの居場所を地域の中で、信頼できる大人たちの見守りの中で、安心して集える場所としてあります。まさしく、中島さんが作られている場所もその1つで、食事する場だったり、学習や遊びを行う場だったり、子どもたちが集えるような場所です。一方で子ども家庭庁は、場所だけではなく、時間・人との関係性も居場所になり得ると示しています。過ごす時間や、この人と一緒にいると安心するという関係性は、確かに子どもの居場所になると思いました。私は、3年間という期間を設けて、子どもの居場所は少なくともすべての市町に1つ以上設置することを目標に活動してきました。地域においては、そういった場所を作りたくて話し合おうとしても、周りに相談する人がいなかったり、市町の担当者からは「補助金等を出していない」という理由で対応してもらうことが難しかったり、なかなか、居場所づくりがすすまない状況にありました。そこで、私が間

に入り、その方の相談にのって、情報提示や、行政と人をつなぐ役割などを担うことによって、子どもが健やかに育つ地域をつくっていくという全体を俯瞰したコーディネートを行っています。

これまでの具体的な取組の背景として、子どもの居場所をつくりたいという方が相談にいられても、そもそも行政の方に地域のことがわかりづらいこともありました。そこで、SNSに情報を載せてみたり、相談会を自治体と協働で開催したりしました。このような実践を重ねていくにつれて、当初は子どもの居場所をどうやったら増やすことができるのかを、常に考え、動いていきましたが、居場所という概念に向き合う中でこういうことに気づきました。それは、居場所をつくるろう、つくるろうって大人ばかりが考えていたけれども、居場所と感ずるかどうかは子ども本人だということです。大人がいくら居場所だと言って言っても、子どもたちがそう感じなかったら、それは居場所ではないと思いましたが、それをなくすためにはどうしたらいいのかは、ここはあなたに

とって居場所になっているのかどうかを本人に聞くということです。子どもたちの生活状況を考えてみると、まず、子どもは8時間くらい学校にいます。小学生くらいだとだいたい家庭には8時間くらいいます（睡眠時間）。とすると、残りの8時間は家か地域にいるということになります。その8時間を子どもたちが安心して過ごせる環境・場所になっているのかと考えたときに（子どもの生活圏において）必ずしも生物学的親じゃなくて社会的親の存在が大事だと思います。



<草田彩夏さん>

そういった考えのもと、子どもの声を聴ききつかけをつくっていくため、昨年度「こどものためのおとなの授業」というまなびの仕掛けづくり（イベント）を行いま

した。子どもの声を聴く大人が増えていくことが大事なのではないかと思うようになりました。これは今年度も開催し、継続的にやっていく予定です。実際やってみて、参加者の方からいろいろな声がありました。

声かけを1人1人していこうと思いましたが、すりこまれた価値観になっていましたという声を聞いて励みになっています。子どもたちを健やかに育てていく環境を考えてくださっているというその志がありがたいと思いました。また、こどもの居場所を自分なりにSNSで発信する取組をしたり、一部を編集して「こどもたちのおとなりさん」という冊子を作成したりしました。地域でこのような活動が行われていることを知っていただけだとは思いますが。

市町の行政の方と顔を合わせることが多く、職員の方は意外と地域のことをわかっていないことが多いと思います。土日にイベントをやっていることが多く、行政の方が参加するのは難しいことはわかるのですが、どんな想いで地域の人が実践し、こどもたちがど

んな表情をしているのかを見てもらいたいと思います。この課題感から、行政の方と地域の方をつなぐ、情報交換の場づくりも行ってきました。

このように私は行政の立場で、地域の声を聴いてきたのですが、様々な関係性が生じやすい地域において、大事にするべきことを見失いそうになることもあり、社会教育士のことを知って、取得しました。特に印象に残っている学びの1つにユネスコの学習権宣言があります。学習は人間の生存にとって不可欠な手段で、なりゆきまかせではなく、自分たちで心地良い環境を作っていくために必要なものです。

これを踏まえ、今の私に求められていることは何かを考えたときに、自分たちの地域をどうしたらよいのか、なにかをやりたいけどもやもやるなどのニーズを言葉にしてもいい、その学習や実践意欲を支えることではないかと思えました。

地域全体で子どもを育てていくというのは、子どもの周りにはいろんな大人がいて、子どもを育

てる親を支えるのも地域で、そういう文化を作っていくかなければならないのではないかと思います。子どもたちの声を聴くことが大事で、子どもも1人でいたいときもあるし、大人の思いが強すぎてもいけません。子どもは、共感してほしいのかもしれない。地域で子どもたちを育てていくには、子どもと「共に」、一緒にどうやっていくかがテーマではないかと思っております。そういった視点を地域で練り上げていくことが重要だと感じています。

○アンケートについて

研修会終了後、紙やスマートフォン等で55名（回答率約67%）の方に回答いただきました。

参加動機では、自身の見識等を広げ職務に活かしたかった（約51%）が一番多く、次いでトークセッションのテーマに関心があった（約44%）となりました。

トークセッションは、地域全体で子どもを育てる取組の紹介や高校生との参画、子ども居場所づく

などの情報を得ることができ、今後の活動に活かしていきたいとの回答をいただきました。

（活動等の参考になった約98%）
参加者の方が、目的意識や関心を持って研修に取り組んでおられることをアンケートから読みとることができました。

実践研修会後に記入していただいたアンケートの一部を御紹介します。（構成上、若干字句を変更しています。）

◇トークセッション

・高校生のボランティアの話聞いて、地域（公民館）で中、高、大学生のボランティア登録制度を作り、その都度募集したら行事が進めやすいかなと思った。

・「社会教育士」の資格があることを知った。

・地域全体で子どもたちを育てる、支えることの大切さ等改めて素晴らしい取組をされていると感動した。

・高校でも取り組むことができることを知った。

・子どもたちとのアプローチのやり方が様々あることが学べた。

・各地区での活動を知る機会になった。自分の地区で実践できるか検証してみたい。

・実践されている活動やそこで感じた思いなどを直接聞けたことがよかった

・他団体の様々な活動内容を知ることができ、知識と刺激を受けた。

◇グループワーク

・各地域での特色のある取組（キャンプ、交流事業など）がされている。

・他市町で行われた行事は参考になった。



・時間が足りなかった。皆さんの地域での取組が聞けて励みになり、これからの頑張りにつながった。

・グループワークの時間を取ってもらい良かった。聞くだけより交わすことが大事だと思った。

・各地区の社会教育委員さんと話ができとても有意義な時間だった。

・（時間が少なく）もう少しグループワークを楽しみたかった。

・グループの皆さんの活動をもっと聞きたかった。

・時間は短かったが、それぞれの活動や思いが聞けて楽しい時間になった。

・様々な立場の視点で意見が出て参考になった。

◇今後の活動

・地域のこれからについて、少し前向きになった。地域の輪やそれをつないでいけるように考えていきたいと思った。

・教育委員との会合を持ちたい。

・地域と子どもたちとのつながりを作るために高校生や行政と連携しながら進めていきたい。

・地域の祭の後継者がいなくて困っていたが、地域の力を伝える場として若者を呼び込む社会を作っていきたい。

・高校生をはじめ、中学生や小学生に「体験の場」を提供していきたい。人をつなぐという役割で。

・高校や子ども食堂など地域活動に積極的に足を運んで少しでも協力できるような活かしていきたいと思った。

・中高生（ジュニア）の育成、大学生以上の若い世代へのリーダー研修を今後も進めていきたい。

・公民館をあと少し開放して子どもが集まりやすい環境を作ってきたい。

・子どもたちの健全育成に向けて地域と子どもたちを積極的につなぐ役目を担っていきたい。

・子どもを取り巻く環境や、貧困家庭の問題など、自分なりに学び積極的に取り組んでいきたい。

わたしの社会教育委員活動

「思いやりのエッセンスを届けに」

白石町 社会教育委員

大串 京子

私が社会教育委員を拝命してから早18年以上がたっているこ

とを役場の係の方から聞いた時、びっくりしたと同時にもうこんなに月日が経ったのかと感じました。毎年楽しく過ごせたのは、メンバーや活動する場に恵まれたおかげだと思っています。社会教育委員になったきっかけはPTAの会長をしていた時でした。皆さんが感じておられるように私にできるかな?どんな活動なのかな?と不安のままスタートしました。できることを見よう見まねで取り組み始めました。メンバーの方々はいろんな団体の代表をされていて、質問されることが適切で凄いなと感じ、視点の違いで意見もいろいろだなと思いました。

私はPTA活動が長かったので、子どもたちへの読み聞かせとおせっかいおばちゃん立場に立つて意見を言うようになりまして。読み聞かせで幼稚園・小学校へ行く子どもたちはワクワク・ドキドキ、前のめりで聞いてくれます。中学校では、はにかんだように無言・無反応な感じで幼稚園、小学校とは違いますが、しっかり聞いてくれるのは伝わってきました。子どもたちからの反応、

ひとつひとつが新鮮で、関わっているのが目に見え居場所を感じられました。良くも悪くも、読み方が下手でも自分が生かされている場所だと感じました。



読み聞かせの様子

もうひとつのおせっかいおばちゃん危ない時、悪い事をした時は、知らない子にも注意をしています。当たり前のことと思われながらもしれません、そんなこと真剣に言ってくれる人が少なくなったことも確かです。子どもから「なんでおばちゃんから叱られる」と言われますが、ひとつしかない命の大切さを解ってほしくて言葉を発しています。嫌われ役がないとダメだと思っていますから。

今、私は介護施設で働いています。人それぞれ環境、人生が異なり、ひとりひとりに接するのは意外と大変です。上から目線で言葉を言われる人・できるのにやる気を出されない人・時間があるとベッドで休んでおられる人、唯一、百歳になられるおばあちゃんが、お世話をするたびに両手を合わせて「ありがとうね」と言ってくださいます。同じお世話でも、その言葉があると仕事していてよかったです。人々との関わりには感謝を言葉にしていくことでスムーズな関係ができることを今感じています。

社会教育って生まれてから老いるまでの長い時間で関わっているものだと思います。偶然自分が今までやってきたこと、今やっていることが社会教育の一環だと気づきました。

ゆっくりと自分のペースでやれるときにお手伝いしていくこと、必要とされ、また出番を与えてもらうことに生きがいを見つけていきたい。時間って人それぞれ同じでも使い方が違ってたくさんのものを収穫できると感じます。参加

しなければ味わえないことを感じ、感動し次に伝えていくことが大事だと思っています。

白石町の基本理念に『人と大地がうるおい輝く豊穡のまち』があります。少子高齢化などの社会の変化を認識し家庭で育てる、学校で育てる、地域で育てるを合言葉に『ひつきやで育てよう!白石のおおどぼう』というフレーズがあります。(ひつきや=みんな)が心に強く響きます。ひとりひとりが出番をもらい子どもたちと関わることができると思います。そんなお手伝いのできることを今後も自分の糧にして微力ながら続けていければと思います。

思いやりのエッセンスが、いろんな所でいい味を出してくれますようにと願うばかりです。

「にぎやか、ムーミン広場」
小城市社会教育委員
高岸 巖

私は最近、全国的に高齢者の孤独死が多発していることを考えると、やはり自分の身に置き換え、何か私にできることはないかと、

行政機関（高齢障がい支援課）のアドバイスを受けながら、高齢者が自身の体を動かし、日々の楽しみを満喫し、元気で暮らせる居場所づくりができないかと考えました。

『いつでも』『誰でも』『なにをしてもいい』をコンセプトとして始めようと、5〜6人の賛同者を得て自宅より徒歩で集まれる、地区内の公民館を会場に設定しました。

日ごとの運動不足を解消し、コミュニケーション作りにもなると考え、その会の名称を「ムーミン広場」と名付けました。

高齢者の興味を引く内容にしなければ参加者は集まらないと仲間と話し合い、地元の文化連盟に依頼をしたら、そのグループで大正琴の演奏をされている方から練習会をするような形でいいならと参加承諾を得ました。

また、90分程度の演奏会、だけでは時間を持て余す事が予想されたので、健康増進課の保健師さんによる健康相談会も依頼し承諾を得ました。

この事により、開催日時指定

および開催チラシの作成、作成したチラシを高齢者宅への配布と事が進み、いよいよ開催日となり担当者と会場づくりをしながら、高齢者の会場入りをドキドキしながら待っていました。幸いにも予定していた人数より多く一安心しました。そして大正琴の演奏が始まると参加者のほとんどがその美しい音色に聞き入っている姿を見て、私は、この会を立ち上げてよかったと胸をなでおろしたものです。

演奏会も終わり健康相談会が始まりました。相談希望者にはまづ血圧の測定をし、その結果で体調の管理方法等のアドバイスをもらい、日ごとの生活の参考にさせていただきます。

初めての会も終わり、参加者に次回も参加されるか尋ねたら、「とても楽しかったので是非参加したい」とお褒めの言葉をいただきました。その後の会ではメニューを増やし、健康体操等を含め今では7〜8種類のメニューから、2種類位の組合せで開催を継続したところ、参加者から感謝の言葉をいただいています。



「ムーミン広場」の様子

地域の高齢者の居場所づくりと思つて始めた「ムーミン広場」が、今では私自身のライフワークとなりました。皆様から元気をもらい、今後も活動を続けていきたいと思ひます。

**「社会教育委員の役割と
社会の現状」**
神崎市 社会教育委員会
平野 禎亮

今から7年前ぐらいになるでしょうか。神崎市教育委員会から、「社会教育委員をお願いしたいのですが。」と連絡がありました。突然のことで、一体どんなことをす

ればいいのか分からないまま「もし私で良ければお引き受けします。」と返事をしたことを覚えています。

だが、委嘱状を受けたにもかかわらず、当初の悩みは次のようなものがありました。一つ目は、社会教育委員の職に就いたが、何をすればいいのか役割がよく分からない。二つ目は、社会教育委員の活動の課題が分からない。三つ目は会議の回数も少なく、各担当者から資料をもとに説明を聞いているだけで職務を果たしているのか分からない等がありました。

言葉に表していなくても、このような思いをされた方がおられるのではないかと思います。

そんな折り、佐賀県社会教育委員連絡協議会研修会の中で、同会長の上野景三先生から「社会教育委員の基本的役割」の演題で講演を拝聴しました。

その中で社会教育委員の基本的役割として、①地域のことを気にかけて②地域を知り③地域の課題を見つけることが必要です、とありました。そのためには、広いアンテナを持ち、市民と行政の『。パ

『イブ役』を果たすことが大事であることを話され、私自身、社会教育委員の役割について、少しずつ分かってきたような気がしました。社会教育法17条2項には「社会教育委員は、教育委員会との協議に出席して社会教育に関し意見を述べることができる。」とあります。神埼市の社会教育委員のメンバーは、学校教育の関係者、社会教育の関係者、家庭教育の向上に資する活動を行う者、学識経験のある者で構成されています。



社会教育委員会会議の様子

そこで、私は委員長として、会議冒頭のあいさつで、次のことを述べるようにしました。「神埼市の社会教育委員に就いている皆様は

専門分野に関する知識を持っていらっしゃる方々です。それぞれの立場から地域社会・社会教育について課題やお気づきのことがありましたら是非、意見を述べていただきたいと思えます。」と。その一言が、少しでも神埼市社会教育委員会の活性化に繋がればと思いました。

また、社会教育委員として、現在の社会状況を把握することは大事なことです。私自身日頃感じていることを幾つか述べてみたいと思えます。

一つ目は、家庭の変化です。少子化は子ども同士の関係が築きにくくなり、兄弟の世話をしたり親戚の家に宿泊したりする生活体験の不足があります。一世帯の人数が減少し核家族が進んできていて、家の中でのつながりや関わりが少なくなってきたかと思えます。地域と保護者のつながりが希薄化していく中で、家以外での子どもの育ちを知ることが困難になってきています。

二つ目は、地域の変化です。地域の教育力の低下、例えば、子どもたちを見守るまなざしが弱くなってきているように思います。子

育ては、個々の家庭だけでは限界があり、地域社会における子どもの学びが失われてきています。かつて、どの家庭も子どもを学校に通わせており、地域社会全体で子どもたちの面倒を見ることが当たり前だと考えられていました。

三つ目は、学校の変化です。学校の働き方改革の推進や教職員の業務の見直し、そして部活動指導者の外部委託があるかと思えます。これまで、社会教育委員の役割と地域社会の現状について記述してきました。地域のこと、社会のことを把握し、広いアンテナで見

つめることが社会教育委員として大事なことだと思えます。今後、感じたこと、考えたこと等を、自身の立場からアドバイスや指導を行い、社会教育委員として微力ながらも何らかのお手伝いをしていきたいと思えます。

「社会教育委員としてできることを」

みやき町 社会教育委員

小柳 テルミ

数年前から、みやき町コミュニ

ティーセンターこすもす館のロビーには、6月下旬になると大きな笹飾りが取り付けられます。

6月初めに、社会教育課の職員さんに竹を数本準備していただきます。笹の枝には色とりどりの折り紙などで作られた飾りや、願い事を書いた短冊をびつしりと結びつけます。この笹飾りは、土曜日開催される「子ども教室」の中で、子どもたちと婦人会が毎年一緒に作成しているものです。ロビーの机には、こすもす館を訪れた方が自由に願い事を書けるように短冊と筆記用具を置いてあります。子どもから大人まで、来館された多くの方が願い事を思い思いに短冊に書いて笹に結び付けて行かれます。

子どもたちの将来の夢、欲しい物などが書かれている短冊に交じり、家族や祖父母の健康や幸せを願う文章を目にすると温かい気持ちになります。

私がみやき町の社会教育委員に就任したのは、婦人会長を引き受けた昨年の4月からです。

婦人会では防災や交通安全の取組、更生保護ボランティアなど

様々な活動を行っており、青少年健全育成、子どもの居場所作りも大きな活動の柱として取り組んでいます。

子どもの居場所作りの取組としては、町の社会教育課と連携して「子ども教室」での指導にあたっていきます。みやき町では年間10回程度、土曜日に校区ごとで「子ども教室」を実施しており、私が指導にあたっているのは北茂安校区の子どもたちを対象とした

「茂安つ子いきいきスクール」で、1年生から6年生までが対象の手芸教室を指導しています。

令和6年度は、みやき町イメージキャラクターの「みやつきー」を作りました。父の日の前日だったので、「おじいちゃんやお父さんにプレゼントをする」と、頑張っている子どもたちの姿に、こちらも優しい気持ちになりました。

他にもフェルトを使ったスヌーピーの飾りと布袋を作りました。手芸教室では、世代を超えて楽しい時間を共有しています。次回の参加を希望してくれる子どもたちもいて、毎回和やかな雰囲気の中で行っています。



「子ども教室」の様子

青少年健全育成の活動としては、子どもたちの安全確保と健やかな育成の一助になればと、子どもに登下校の時間に合わせて通学路に立ち、見守りながら挨拶などの声かけをする「愛の一声運動」も継続して行っています。これは婦人会の会員一人一人も継続して行っている運動です。

また、高齢者の方に対しては、町主催の敬老会に、祝舞とわが町みやきの踊りで参加しています。クリスマスには一人暮らしの方に手作りの作品やお菓子をお届けしたりする活動も継続的に行っています。

子どもから高齢者まで様々な世代の方と接しながら、人と人と

の絆づくりの大切さや、あらゆる世代の方が安心していきいきと生活できる環境づくりの重要性を改めて感じているところです。

みやき町は「子育て支援のまち」、「健康長寿のまち」宣言を掲げ、様々な施策に取り組んでいます。私も、婦人会活動で培った経験を社会教育委員の活動に活かしながら、わがまちの活性化のために自分の出来ることを無理なく、息の長い活動を今後も続けていきたいと思っています。

編集後記

1月の実践研修会はいかがだったでしょうか。開催当日、大雪となり、開催が危ぶまれましたが、多くの皆さまにお集まりいただき、感謝申し上げます。

今号では、実践研修会の概要を掲載しました。昨年は、暑い日が続き、寒くなってきたかと思えば、いきなり秋をとばして冬が来たような感じでした。そして、1月下旬から2月中旬は厳寒の中、実践研修会は、熱のこもった参加者のトクで寒さを感じさせないものと

なりました。この勢いを保ちつつ、社会教育委員の皆様はそれぞれの地域でさらなる活躍をされることを期待しています。

さて、第11号から社会教育委員の皆さまに「わたしの社会教育委員活動」というテーマで、それぞれの委員の方の多方面での活動を執筆いただいています。

基本的には市町の輪番による執筆ですが希望される場合はご連絡ください。

佐賀県社会教育委員連絡協議会事務局(佐賀県県民環境部まなび課)
〒840-8570 (住所不要)

Tel 0952 (25) 7313

Fax 0952 (25) 7406

✉ manabi@pref.saga.lg.jp

